

## 「スイミングプール」

竹並 麻夕子

扉を開けた。ひんやりした冷氣とぼわぼわした温かい空気が、同時にわたしの体を包みこむ。ぬるぬる濡れた階段を降りて行くと、そこもじっとりしめったタイルだ。足の裏が汚水を踏んで歩くような気がして、心地悪い。

それを我慢して、暗い通路を抜けると、ぱっと、明るい水面が現れた。水はたつぷりと二十五メートルの水槽いっぱいになり満ちていて、上からの照明に反射してキラキラ光って見える。

——今日は、クロールを百メートルは泳がなくなっちゃ。

わたしは、胸の中でそつとつぶやく。毎週水曜日の午前十時。スポーツクラブの地下にひっそりと横たわる青いプール。そこが、わたしにとって、一番神聖な場所なのだ。夢見るような青さを湛えた水。プールの端に、慎ましやかに存在する銀色の梯子。レーンごとに区切られた赤や黄のプラスチックのロープ。そういうものを見てみると、心にかかった雨雲のことなど忘れてしまうことさえある。ひよつとしたら、わたしはスイミングプールというものを偏愛しているのかもしれない。

平日の午前のプールは静かだ。中央のレーンには、よく日焼けした男性がすさまじい水しぶきをたてて、クロールを泳いで見せているところだった。一番端のレーンでは、小さなお婆さんがゆっくりと歩いている。そして、もう一方の端のレーンでは、誰かが平泳ぎをしていた。

わたしは、腕を振って見せたり、腰をひねったりして形ばかりの準備体操をする。本当は、一刻も早く水の中に入りたいたいんだけど、子供の頃母親から海やプールに入る前は準備運動が必要なのだと口が酸っぱくなるまで注意されたのだ。

「いい？ マリ。いきなり水に入っちゃ、足がつったり心臓が麻痺したりすることがあるんだからね。溺れて死ぬなんて、一番恐ろしいことだよ。目が出目金みたいに飛びだして、顔が紫色になるんだ」

ようやく準備運動を終えて、ゴーグルをかける。そして、飛び込み台の方へ行こうとした時、向こうの端にいた女性が泳ぎをやめ、梯子を上がりだしたのが目に入った。だが、その姿を見て、わたしはぎょつとしてしまう。女性は異様なほど痩せていたのだ。ガリガリなんていう形容詞が可愛く思えてしまうような痩せ方で、背中からも背骨の形がわかるほどだった。枯れ枝みたいな足が、プールの上のタイルに上がり、彼女がこちらを見た時、わたしははっとした。

——本間さんだ。

本間さんは、以前わたしがアルバイトしていた結婚式場で、一緒に働いていた人だった。骸骨の標本にほんの少しだけ肉付けしたような体に、これも目じりの上がった細く長い顔をしていて、肌の色は緑がかった白さ、という特異な容貌の持ち主だったから、彼女に一度会ったら忘れられないだろう。

本間さんの方も、わたしに気づいたようだった。目を大きく見開き、小走りにこちらに近づいてくる。

「川原さんじゃない。久しぶりね」

そう言いながら、プールサイドにあるベンチに座り、どうぞというように傍らを指し示した。でも、わたしはちょっとためらってしまふ。彼女とは全く親しかったことはないし、実際のところ、本間さんは職場の仲間からも敬遠されていたのだ。

「ねえ、あの人気持ち悪くない？」

「本間さんでしょう。あんなに痩せこけて、顔もまるで宇宙人みたいな変わった顔してるもんね。私思うんだけど、あの拒食症か何かじゃないかしら？ あの痩せ方は異常よ」

ロッカールームの中で、アルバイト仲間がひそひそ話していたことを思い出す。わたしたちの仕事は結婚式の披露宴の手伝いや厨房でできあがった料理を客席に運ぶことだったが、本間さんがワゴンを押して会場に現れると、一瞬沈黙が落ちるのがわかる。大きなつりあがった目、ミイラのようなこけた頬……こうしたものを見ると、人は何と云っているのかわからなくなるのだ。「結婚式という、めでたい席にどうしてあんな女性を出すんだ」——そんな文句も、客から寄せられたと聞く。

「あなた、このスポーツクラブに通ってるの？」

本間さんは、顔を寄せ囁くように言った。

「ええ。まだ一年くらいなんですけど」

「まあ。私はまだ三回目よ。今度の職場は週末休めないんだけど、こうして空いた日にプールにも来れるってわけ」

「結婚式場に勤めておられるんじゃないですか？」

わたしは驚いて言った。気楽なアルバイトのわたしと違って、彼女は正社員だったはずだ。本間さんの目が瞬間かげった。

「やめさせられたのよ」

彼女はぼつりといった。

「私がいたら、会場の雰囲気は暗くなるってね」

何と云っていいかわからず、わたしは黙った。

「私としては一生懸命勤めたつもりよ。早朝に出勤することだって、残業だって厭わなかったし、人が何を言っても気にしないようにしてた。でも、駄目ね。人は見かけが普通じゃないってだけで、平気で残酷な振る舞いに出るわ」

「そんなひどい人ばかりじゃありませんよ」

「そうかしら？」

本間さんは首をかしげ、わたしをじっと見た。でも、それはただの視線というより凝視されているという熱心さが感じられて、わたしは居心地が悪かった。

「あなた、若いわね」

「えっ？」

「今、幾つなの？」

「二十五歳です」

答えながら、わたしは本間さんを見返した。水からあがったばかりで、キャップからはポタポタとしずくが額に垂れている。緑色の無地の水着を着ているものの、その上からでさえ、骨のありかが感じられた。白い皮膚は濁った牛乳のような、生気のなさで、全体に緑がかって見える。その薄い皮膚の下で、血管は火星の運河のように複雑にからみあっているのかもしれない。しばらく見ていたものの、彼女が幾つくらいなのかわたしにはわからなかった。

「本間さんは、お幾つなんですか？」

「ふふ。あんまりはつきり答えたくないけど、ひと昔前なら、オールドミスといわれた年ね」

そう言いながら、彼女は立ち上がり、ベンチそばのクロームの横棒にかかっていたタオルをひらりと取った。そして、何も言わず通路の向こうに消えていった。タオルは、赤と青の星条旗がデザインされた賑やかなもので、それは痩せた肩をいっそう弱々しく見せていた。

わたしは溜息をついて、視線をプールに戻す。吹き抜けの天井の右には、大きく窓がくり取られ、ジムでエアロバイクに乗っている人たちがこちらを見ていた。さっきまで泳いでいた男性はゴーグルを外し、荒い息を吐いていたが、その体はまるでカブトムシのようにがっしりと艶やかに光っている。小柄なお婆さんも歩くのをやめていたが、そのままプールの中ほどで立ちつくしている——まるで、小さな女の子が置き去りにされたみたいに。

もちろん、わたしの毎日はプールで埋めつくされているわけではない。水曜日以外の日は自宅から歩いて十分ばかりの小さなパティスリーで働いている。朝十時に開店なので、それより十五分ほど前に出勤し、夕方の六時までずっと、小さな店内のショーケースの前に立っている。ショーケースには、まるで精緻な工芸品みたいにきらびやかなケーキがならんでいる。

ドイツの黒い森をイメージしたチョコレートのスポンジ地とクリームのお菓子、帽子の形に焼いたパイにフルーツを飾りみたいに盛ったケーキ、クラシックなアルファベットの形を表面に刻んだワッフル……主人の小原さんの作るお菓子は姿も上品だったけれど、口に入れた途端、淡雪のような心地よさを残して喉の奥に消えて行くのだ。

だが、わたしには、一つだけ許せないケーキがあった。それは、陳列ケースのちょうど真ん中あたりにおさまっている。つやつやとガラス質の輝きを見せる莓、純白の処女地み

たいに広がるクリームの層——それは雪原にぽつんと置かれた赤い実のようにも見える。でも、わたしは、この誰もが大好きだというショートケーキが大嫌いだった。正確に言えば、苺が嫌いなのだ。

苺のぶつぶつと、細かく生えている毛……それを見ると、わたしは無数の虫を連想してしまう。その虫たちが這いだして、白い柔らかなクリームに埋まっていくなを思い描いてしまうのだ。

本間さんと会った翌日も、わたしはケースの前に立っていた。晩秋の日ざしがドアの硝子越しに忍び込み、ケースの上にも柔らかな縞模様を作りあげている。

「こんにちは」

そう言いながら、親子が入ってきたのは、午後三時過ぎだった。

「お友達に、このケーキが美味しいって聞いたの。何か、お勧めはありますか？」

まだ三十代半ばと見える母親は、わたしに微笑みかけた。きれいにセットされたショートカットからは、形の良い耳がのぞいている。

「そうですね」

わたしは、母親が連れている女の子の方に視線を向けた。その子は六、七歳くらいに見えた。紺色の上品なワンピースを着ていたが、よく見ると黒猫のアップリケがポケットにしていた。

「お子さんは、どんなケーキがお好きなんですか？」

母親が答える前に、女の子が叫んだ。

「ショートケーキ！」

その口調があまりにもきつぱりとしていたので、店内には一瞬しんとした空気が流れたほどだった。

「そうね。ショートケーキもいいけど、ここには美味しいケーキがいっぱいあるの。このタルトタンなんかどう？ 林檎がとろけるように柔らかくて、硝子みたいになった砂糖の層と絶妙にマッチしているわけ」

わたしは、女の子にっこり笑いかけた。突然、どうしてもショートケーキを買わせたくない、という気持ちが一瞬湧いてきたのだ。女の子は、唇を噛みしめ、キツという音が聞こえるくらい強い目つきで、こちらを睨んだ。

「そんなものいらない。あたしは、ショートケーキが欲しいの。シ・ョー・ト・ケ・キをお願い」

黙ってトングをつかむと、わたしはショートケーキを箱に入れ、水色のシフォンのリボンをかけた。キイ、とドアの蝶つがいのきしむ音を立てて、親子が出ていった後、わたしは想像する。女の子がふわふわのクリームと苺をおなかに入れ、無数の小さな虫がそこで蠢くさまを。虫たちは、胃や腸の粘膜に噛みつき、暴れるだろう。その時、女の子は泣き叫び、悲鳴をあげる——。

次の週の水曜日、本間さんは来ていなかった。朝のプール室は洗いあげられたように清潔だった。水はいつものようにたっぷりと満ち、表面は寒天みたいにゆらゆらと揺れている。

わたしは深呼吸すると、そろそろと水の中に入っていった。温水プールのはずなのに、どうして水に入った時、冷たく感じるのだろう。ひんやりした感触がわたしの足やおなかや腕に絡みついてきて、濡れた海草に包みこまれるような不快な気持ちになる。そのまま、じっとして体が、水に慣れるのを待つ。ふと上を見ると、エアロバイクに乗っている人がじっとこちらを見ていて、目があっってしまう。そんな時、わたしは自分が小さな魚になって、水族館の水槽の外側から眺められているような気になる。

「いつもお会いしますね」

その声はとても小さかったので、最初わたしは気づかなかった。隣のレーンにいたお婆さんが、いつの間にかわたしのそばにびったりと寄り添っている。

「若い方が平日の朝いらっしやるのは、珍しいから覚えていたんですよ」

「あっ、それは仕事の都合で……」

慌てて答えたが、お婆さんはにこにここと笑っているだけだった。話すのは初めてだったし、こんなに関近で見えるのも初めてだった。目と目の間が離れ、鼻が平べったい。しなびた皮膚には、まるで斑点模様みたいに細かなシミが散らばり、胸は垂れ下がっているのに、おなかにはぽこんと出ている。全体の印象はカエルそっくりだった。カエルお婆さんは続けた。

「きれいなフォームで泳がれるなあ、いつも感心して見てました。わしも、あんな風に泳げたらいいのに、って」

上品な喋り方と「わし」という言葉が結びつかなくて、わたしはちよつと混乱した。

「そういえば、泳がれるのを見たことはなかったような気がします」

「かなづちなんですよ、あなた」

カエルお婆さんは、何か重大な秘密を打ち明けでもするかのような、ひそひそ声で言った。

「というより、長いこと水には近寄れなかったんです。長い、長い間ね。どうしてか、おわかりになりますか？」

「いえ」

そんなこと、わかるわけがないではないか、と言いたいのをこらえながらわたしは答えた。

「昔のことですけれどね……。わたしには姉がいたんです。三つ上だったんですけど、わたしとは違って何でも器用にやっつてのける優等生でしたよ。子供の頃住んでいたのは、山あいの田舎で、学校にもプールなんて気のきいたものはなかったし、海なんて見たこともない子供もいました。でも、子供たちは川で泳ぐのを知ってたんですよ」

そこで、お婆さんはひと息ついた。

「その子たちをまとめて、小川へ連れ出していたのは、姉です。姉は知らぬうちに、リー

ダーになってしまふようなところがあつたんです。あの頃は、今と違って山の清流がそのまま流れるきれいな川がいっぱいありました。姉たちは、はやや鮎たちと一緒に競争で泳いでいたものです。わしはさつきも言ったように、まったくのかなづちでしたから、みんなが楽しんでるのを指をくわえて見ているしかなかったんですけど」

わたしは黙って聞いていた。

「でも、そのうち姉はそれだけじゃ我慢できなくなったんでしよう。誰にも言わず、こっそりと山の淵で泳ぎ始めていました。わしだけが、それを知っていました。小さな小川と違って、淵は広がったし思うままに泳げたんだと思います。姉が危険な淵で泳いでいるのを、こっそり物影から見ていたこともあります。彼女は人間界の切符を捨てて、人魚に戻ってしまったみたいでした……そして、ある夏の終り、姉はいつまでたっても帰ってきませんでした」

「えっ？」

「わしは、騒ぐ両親を後に、こっそりと山にのぼりました。すっかり日が傾いていて、淵は暗い色に沈んでましたけど、わしには姉がわかりました。彼女はほっかりと水面に浮きあがったまま、水の流れに沿ってぐるぐると淵を回っていました。木から落ちた葉が同じように、ぐるぐる円を描いていたのが、なぜか印象に残っているのですよ」

そこで、お婆さんはわたしの顔をじっと見た。茶色がかつた瞳は、その時の光景を映し出しているかのように、淡い影に縁取られている。

「それから、わしは水にはいっさい近寄れなくなりました。お風呂に入る時だって、死んだ姉と同じように水底に引つ張られる恐怖を感じる事があつたものです。——でも、この年になれば姉のところへ行くのも時間の問題でしょう？　そう割り切つてしまえば、水に入ると、姉がそばにいるように感じられるのだから不思議なものです」

わたしはどう言おうか、考えていた。すると、お婆さんは微笑んだ。いや、微笑しようとしたのだろうが、口元がピンと左右に大きく引つ張られ、カエルか平目がにたりと笑つたみたいに見えた。そのまま、お婆さんはプールから上がり、小さく頭を下げ、出口の方に向かった。

ホッと溜息をついて、わたしは仰向けに水面に浮かんだ。人から突然話しかけられると、何とっていいかわからなくなる。不用意な一言が、取り返しのつかない傷を残したり、不穏な空気を醸し出すのではないか、と思つてしまうのだ。無口で、あまり印象に残らない女の子、それが多分、他人の目に映るわたしの姿だろう。それなのに、いやそれだからなのか、人は、昔からわたしに小さな打ち明け話をしていったものだ。この心には、透明で残酷な針が光っているのに。

ぼんやりと、水面に漂いながら思う。お婆さんのお姉さんは、こんな風に浮かんでいたのだろうか？　彼女が小川と一緒に泳いでいた魚たちは、こっそり彼女をつついたかもしれない——。

一時間ばかり、集中して泳いだ後、水から出る。そして、銀色のコックをひねり、シャワーの下に立つ。消毒液の入ったプールの水を丹念に、体や髪から洗い流して、シャワー

を止める。それから、冷たい風の吹く廊下、階段を歩いてゆく。体はがちがちに寒く、足の裏はぬるぬると濡れている。まるで、水底の国からやってきたゾンビのようだ、とわたしは思う。ようやく、更衣室のドアを開けた時、むっとする生温かい空気がまとわりつく。それなのに、わたしの体はまだ寒い。

更衣室の中には、ロッカーがずらりと並んでいて、老若さまざまな女性が着替えをしている。彼女たちは驚くほど、あっけらかんとしている。水着を脱いで、裸をさらしていたり、パンツ一枚という姿で髪を乾かしていたりする。奥の浴場から出てきた、太った女の人は、胸回りも腰回りもたっぷりしていて、まるで土偶を思わせるシルエットだ。こちらへ向かってくる体はほんのり上気していて、色つやのよいハム肉が歩いているみたいだった。

わたしは、こそこそ着替えをすませた後、鏡の前に座る。顔は青ざめていて、唇は紫色だ。少し充血した目の奥からは、森の中の暗がりのような影がのぞいている。水の中に入っている時は、自分の中の原初的な場所に帰ったみたいに、満ちたりているのに、プールの外はなぜこんなに不快なことばかりなのだろう。水着から水がしたたっていくことや、濡れた廊下、野蠻な裸を誇らしげに見せる女性たち……。

隣では、中年の女性がメイクしているとところだった。眉を丹念に描き、マスカラで睫毛を縁取っている。あんまり何度も繰り返すので、睫毛はハブラシの毛と同じくらいの太さになっていた。タロ芋のような顔の復元が終わった女性は、満足そうに鏡に向かって微笑みかける。不意にわたしは、彼女の頭の上に紙の王冠を置きたくなる。まるで、道化の国の王女さまにするように。

その次の週、本間さんはいた。泳ぐ気がないのか、タオルを肩にかけたまま、ぼんやりとベンチに座っている。

「やっぱり、来たわね」

彼女は、わたしの方を見上げ、笑いかけた。

「この時間帯に、あなたが来るんじゃないかって気がしたの」

「いつも、十時頃、スポーツクラブに来るようにしてるんです」

「朝の十時——それは理想的な時間ね。デパートだって開くし、たいがいの店も店開きをする。でも、私としたら夜に活動して、この時間は眠っていたいくらいだわ」

わたしは呆れて、本間さんを見た。思ったよりも変わった人らしい。

「八時半頃起きて、朝食食べたたり、準備してたりしたら、自然それくらいになるんです」

「そう」

「本間さんは、どのあたりに住んでおられるんですか？」

「急にプライベートなこと聞くのね」

「ここから、家が遠いのかと思って」

「ええ。フォルクスワーゲンのゴルフを運転して、山から降りてくるの。この場合の山っ

ていうのは、分譲住宅の集まった団地っていう意味だけど。車で二十分くらいかかるわね」  
「わたしは、散歩がわりに、児童公園を通ってくるんです。歩いて、十五分にもならない  
と思います」

「御両親と暮らしてられるの？」

「はい」

「それで、ケーキ屋さんで働いてるのね」

「どうして、わかるんです？」

本間さんに、そんなこと話したことはないはずだ。彼女は、薄い唇を少しゆるませた。  
その端に、さざなみのようなかすかな皺が寄っている。

「人は、属している場所やアイデンティティーをオーラののように、あたりにばらまいてい  
るものなの。それを感じ取れる者は、感じ取れるのよ」

「霊能者みたいに？」

わたしは半信半疑で聞いた。

「あるいは、巫女のように」

そう言って、しばらく本間さんは黙った。わたしは横に座ったまま、彼女の姿をじっく  
り観察した。これ以上はないというくらい痩せ細った体や、そそけだった頬。それとは対  
照的に後ろへ大きく張り出した、後頭部——本間さんは、以前写真で見た、古代エジプト  
のファラオのミイラを思いおこさせた。博物館のガラスケースの中で、人々の視線にさら  
されながら、永遠に眠っている数千年前の王を。

あるいは、彼女はアウシュビッツの少女も思わせた。収容所の門に入る時、薔薇色に輝  
く頬と褐色の髪を持ったユダヤの少女は、あつという間に幽霊のような姿に変わってしま  
う。鉄条網の向こう側から、少女は目の下に黒い隈を浮かせ、悲しげな光を湛えた瞳で、  
こちらを見ている——。

「私は伯母と二人暮らしなの」

突然、本間さんが喋りはじめた。わたしは、はつとして、ミイラやアウシュビッツの事  
を頭から追い払う。

「母の姉さんだけけど、小さい時、両親が離婚した私を養女として引き取ってくれたわけ。  
私はその頃から、人目をそばだたせる外見をしていたわ。どんなに栄養たっぷりな食事を  
とつても、少しも肉はつかなかったし、どんなにマッサージしても肌に赤味がさすこと  
もなかった」

わたしは黙って聞いていた。この話に目的地はあるのか、それとも行き場をなくして空  
中に漂っていくのか、と思いながら。

「伯母は、私のことを気に病んで、あらゆることをしたわ。温めた牛乳にたっぷり蜂蜜を  
入れて飲ませたり、唐揚げを山のように盛った皿を出したり。でも、だめ。私を乗せた体  
重計の量りは一ミリグラムも増えなかった……絶望した伯母は、私の体にお経を書いたの」

「えっ？」

「お経よ」

本間さんは、くすりと笑った。

「『耳なし方』』の話に出てくるみたいだね。伯母は、書道の先生だったの。万葉仮名で、和歌をすらすら書いて見せたりしたものだわ。水莖っていうのは、美しい文字のことを言うそうだけれど、伯母の書く字がまさにそうだった。そして、伯母は心をこめて文字を書けば、そこに魂魄が宿るに違いない、と信じるようになってしまったわけ」

「それで、耳なし方ですか」

「そう。ある日、伯母は、私を座敷に呼ぶと、力いっぱい服を脱がせた。ベリベリ、バリバリ……、そういう音が聞こえそうな勢いでね。そして、因幡のウサギみたいに震えている、私の体に次々毛筆で、経文を書いていった。言っておくけど、普段の伯母は信心深くもなんともない合理的な人間だったわ。暗号のような文字がわたしの体じゅうを埋めつくしていった時、墨の匂いがふんとしたのを覚えてる。そして、文字は皮膚の下に消えていったの」

「消えた？」

わたしは驚いて、彼女の顔を見た。宇宙人の赤ん坊を思わせる表情は、ミステリアスな雰囲気でこちらを見ていた。

「まるで、砂地に水がしみこむみたいだね。文字たちは、皮膚に少しずつ溶け込んでいて、後には何も残らなかった。でも、それが『呪い』だったかのように、私の体は今もこのまま、という訳」

「伯母さまが、反対のことを願われたのにな？」

「あれは啓示だった、と伯母と私は思うようになったの。この世界には、前もって決定されていることがあって、それをどうこうするべきじゃないって、ね。私の体も、その一つという訳よ」

わたしたちはしばらく黙って、座っていた。窓<sup>1</sup>に光が降りそそぎ、プール室全体が、居心地の良いサンルームみたいだった。床のタイルは一つ一つが、磨かれたように輝いていたし、プールは南国の海と同じくらい透明だ。今日来ているのは、例のカエルお婆さんとわたしくらいの若い女性の二人組だった。お婆さんは、レーンの中を規則正しく歩いていたし、女性たちはあまり泳げないのか、申し訳程度にパシャパシャやって、後は水の中でお喋りしている。

「このプールに通ってるのはね、」

本間さんが突然、口を開いた。

「儀式のためよ」

「儀式、ですか？」

思わず首をかしげてしまう。でも、本間さんの変わった喋り方には慣れつつあったから、そんなにいちいち真面目に受けとることもないんじゃないか、とたかをくくる気持ちもあった。

「プールに入ると、外界がすーっと遠ざかって、自分が小さな存在になったような気になるの。生まれる前の世界に戻って、暖かな光に包まれているみたいなきぶん。そこでは、

深い眠りがあって、記憶も夢もない。わたしは柔らかな水と光の中で覚醒する瞬間を待っているという訳」

「そう感じるのが、儀式という訳ですね？」  
「ええ。そうよ」

本間さんは微笑した。けれど、その時、不穏なざわめきがプールの一方から聞こえてきた。二人組の女性が、こちらを指さして何か叫んでいる。そして、水の中を歩いていたはずのお婆さんの姿が消えていた。

わたしは、ベンチから立ち上がると、プールに駆けつけた。水面をのぞきこんで見ると、お婆さんの小さな体がゆらゆらとくらげのように漂っていた。キャップからはみでた白髪がべったりと首筋に貼りついて、手足は頼りなく投げ出されている。わたしは水に飛び込むと、お婆さんを抱きよせ、何とか床の上に引っ張り上げた。お婆さんは意外に重かった。まるで、小さな沢庵石がそうであるように。

そして、急いでクラブのインストラクターを呼びに行った。青年のインストラクターを連れて戻って来た時も、女性の二人組は棒立ちになって立ちつくしたままだった。そして、本間さんの姿は消えていた。お婆さんは息をしないのか、一ミリも身じろぎしない。  
「これは、いけない」

お婆さんの手首を取ったインストラクターは、あわてて部屋を出て行く。そして、やがて救急車がやってきた。担架に乗って運ばれていくお婆さんの姿は、傷ついた昆虫のように弱々しく見えた。

本日はプールを使用してはいけない、と言い渡されたのでわたしはあきらめて更衣室に向かった。考えてみれば、今日はまったく泳いでいなかった。着替えをバッグから取り出した時、ふと気づく。濡れた水着をしまう袋には、わたしが働いているパティスリーの名前が書いてあるし、バッグ自体主人の小原さんがデザインした、特製のものだ。このパティスリーに勤めていることが、たやすく想像できるはずだった。

パティスリーの店内には、いつもいい匂いがする。それは、なぜかわたしに異国の石畳の道や、その路地の奥にある小さな店を思いおこさせる。古い石づくりの建物には、鎧戸の開けられた窓があり、かすかな灯りがともっている。そこでは、現実では絶対手に入らない夢のお菓子を売っているのだ。グリム童話に出てくる、おかゆとかスープみたいに。

「川原さん、いつもありがとうね」

小原さんが、奥の工房から出てきた。同時に、甘いカスタードクリームや焼き菓子の匂いがあたりに漂う。これは、シュークリームに違いない。

「アップルパイも、チョコレートケーキもほとんど売れました。この二週間くらい、すくなく売れ行きが良いです」

わたしは、簡潔に報告する。飛ぶように、とまではいかなくても次から次へお客さんが

やってくるのだ。

「秋が深くなってくると、皆ケーキが恋しくなるのさ。ストーブや暖かな灯が、魅力的に見えるようにね。僕らにとっては、最高のシーズンという訳だ」

小原さんは、両手を腰のところにあてて笑ってみせた。体のあらゆるところが脂肪に包まれ、眼鼻立ちもはつきりしない有様だ。顎はそのまま首につながっていたし、瞼に脂肪がついているので、目は象と同じくらい小さく見えた。手はマシユマロのようだったし、おなかには息をするたびにゆらゆらと揺れた。

——クリームと砂糖と卵が、僕の体を作ったんだ。

小原さんは、いつも冗談半分に言っていたものだ。わたしは、彼の体をじっと見た。そして、突然、本間さんのジャコメッティの彫刻のような姿を思いだした。このどっしりとした肉の塊をひきちぎって、本間さんの体に肉付けできたらいいのに、と考える。二人は、同じ人間とは思えなかった。

「じゃあ、僕は工房に戻るよ。あと、もう少しだからよろしく」

小原さんは、そそくさと扉の奥に消えた。わたしの視線が、気になったのかもしれない。そのまま、わたしは店内を見渡した。売り場の横には、喫茶スペースがあって、木のテーブルと椅子が三、四つばかり置かれている。カルチャー教室帰りらしい女性が三人、静かにお茶を飲んでいた。

——本間さんは、ああやってお茶の時間を取ることがあるのかしら？

わたしは、彼女が紅茶やシュークリームの皿を前に置いて、それを食べるシーンを思い浮かべようとする。けれど、それはどうしてもうまくいかなかった。シュークリームは小さな口には大きすぎ、彼女はそれが世にもまずい食物であるかのように、しかめっつらしている。ショーケースの中には、相変わらずさまざまなケーキが品の良い宝石のように並んでいた。わたしは、それらのケーキを、本間さんの細い喉に押し込んで、彼女の体じゅうにクリームと砂糖をつめこみたくなる。

その次、スポーツクラブに行った時、わたしはいつものように受付のデスクに向かう。会員証を見せ、ロッカーの鍵を受け取るためだ。でも、この日は別に確かめたいこともあった。

「あの、すみません」

そう声をかけると、受付の女の子——多分、二十一か二くらい。ポニーテールをゴムでまとめ、スポーツクラブのロゴの入ったウェアを来ている——は、「はい？」といぶかしそうに首をかしげた。

「先週、お婆さんがプールの中で倒れたんですけど、その後どうなったんでしょうか？」

「ああ……」

女の子はかすかに溜息をついた。あたりに不吉なオーラが漂う。

「あの方は亡くなりました。急いで、病院に運ばれたんですが間に合いませんでした。心

臓麻痺だったみたいです」

「心臓麻痺……」

わたしは、つぶやいた。プールの水面にゆらゆら浮いていた姿が思い浮かぶ。考えてみれば、わたしはお婆さんの名前も知らなかった。

「お気の毒なことでした。でも、当スポーツクラブで泳ぐのが危険、ということは絶対ありませんから」

絶対、というところにワンオクターブが入っていた。

「わかりました」

わたしは鍵を受け取り、更衣室に向かった。そして、一年前デパートのスポーツ用品売り場で買った、黒い地に小さな白いドットがついた水着に着替える。

プールには、誰もいなかった。水は眩しく光り、銀色の梯子も端正な様子で、やってくる人間を待っていた。明るく広々とした空間であるのにもかかわらず、なぜか淋しいリゾート地のように見える。

梯子を伝って、静かにプールに入る。少し肌寒いような、ぬるい温水が、わたしの内側をひたしていく。

——何だか、優しい気持ちになれるから不思議。

本当に、そうだった。忌み嫌われる植物のように、心に芽生える棘が溶かしていかれたような気さえする。水に包まれるだけなら、お風呂でも同じ気持ちになるけれど、プールの中で力いっぱい泳ぐと、五感が研ぎ澄まされていく感覚も養えるのだ。

わたしは、一時間近く、無我夢中で泳いだ。最初はスピードをだしてクロールを、その次は背泳ぎ、最後はプールの縁につかまって、足をばしゃばしゃやってみる。心地よい疲れが、全身を柔らかく包んでいくのがわかる。

「今日は、わたしたちだけしかないのね」

不意に声が上がらふりかかり、思わず顔をあげると、そこにいたのは予想通り本間さんだった。

「いつも静かだけど、特別しんとした感じがするわね。鼓膜の奥に風が吹いているみたい」

鼓膜に吹く風？ わたしはうまくそのイメージをつかむことができなかった。そして、彼女がプールに身を沈めた時、なんとなくいやあな気持ちになった。完璧な孤独が、無理やり冒されたような、苛立ち。

「先週、ここで泳いでいたお婆さんが死んでしまったというから、人が近寄らないんじゃないですか？」

わたしは、まっすぐ本間さんを見て言った。

「あっ、あの人が死んでしまったのね」

本間さんは答えたが、そこには関心らしいものは影すらなかった。そして、仰向けになると静かに、水面に体を浮かせた。

「それが、儀式なんですか？」

「そう。赤ん坊は母親の胎内で、こんな風に行っていると思わない？」  
「えっ？」

彼女の話の運びがわからなくて、わたしは思わず聞き返した。

「羊水に包まれて、漂っている赤ん坊の気持ちを想像してみるの。過去もなく、未来もない。ただ光の祝福が満ちている場所——それが、このプールでも感じ取れるんじゃないかって」

本間さんは身を起すと、プールの中に立った。

「私は、赤ん坊を流産したの。胎内にいた子供は、どこか暗い場所に帰ってしまった。でも、ここに来ると、赤ん坊と一つに溶けあえるような気持ちになれるわ。ゼリーのような柔らかな水の中でね」

わたしは、本間さんの姿を見た。ジヤングルのような濃い緑の水着は、彼女の肌をよけい緑がかって見せている。アウシュビッツの粗末な寝台に横たわっていた少女そっくりの、骸骨のような体。薄い板みたいな腹は、そこに小さな生命を宿していたことがあるとは思えなかった。ふいに、わたしの中の棘が心の底から這い上ってくるのを感じた。それは、襲いかかる相手を求めて、わたしの内側をがりがりとひっかいた。

「それは、仕方のないことだったんじゃないでしょうか」  
わたしの舌はなめらかに動いた。

「失礼ですけど、本間さんの体を見てみると、子供を出産することができるとは思えませんから」

真空をナイフで切り裂いたような、沈黙が満ちた。あらゆるものが、凍りついていた。本間さんは、一言も発しないまま立ちつくしていた。顔は石膏の仮面のように表情がなく、その目はわたしより遠くを見ている。やがて、ふっとその目に影が横切り、それが合図だったみたいに、本間さんはプールから出ていった。わたしに背を向けたまま、静かな足音で。

わたしは、しばらくぼんやりとしていた。心臓がどくどくと音を立て、鋭い棘に血がこびりついているのを感じながら——。

やがて、スポーツクラブを出、児童公園前の横断歩道で、信号が変わるのを待っていた時——グレーのフォルクスワーゲンがわたしの前を横切って行った。だが、それが本間さんだったかどうか、確かめることはできなかった。

それから、わたしはスイミングプールに通い続けている。あれ以来、本間さんに会うことはないし、もちろんカエルお婆さんもういない。

青い硝子のような水面に身を浸しながら、わたしは想像する。温かな羊水にくるまれないが、この世の光を浴びることを夢見ている、赤ん坊の姿を。そして、わたしは手足を丸めて、静かに水の中に沈んでいく。はるかな場所で眠り続ける胎児のように。